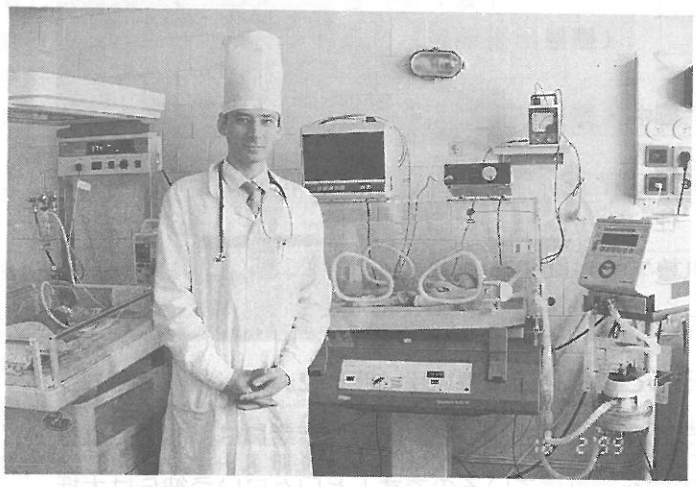
NO. 50. 1999. 3. 31.

ジトーミル州立小児病院の新生児に、またまた朗報！

「人工呼吸器付き保育器」がラインアップ！！しました。

50号記念 !!
（P4～5に特集があります。）



＜新生児の治療にあたるイーゴリー医師。
「人工呼吸器付き保育器」（右）と、
「蘇生装置付き新生児用保育器」（左）＞

「救援・中部」事務局長の河田さんが、１１日間（２月９日～２月１９日）のウクライナ訪問を終え、ジトーミル州各地を精力的に回って入手したたくさんの情報を持ちかえりました。

中でも、‘９８年度の「ボランティア貯金」の交付金で贈る事ができた、外科手術用の「人工呼吸器付き保育器一式」は、『チェルノブイリ事故のあと激増してしまった出生時障害（年間100～200例）の手術にも、大いに威力を発揮するだろう』と小児病院の医師たちから絶賛されています。

‘９７年度に贈られた「蘇生装置付き新生児用保育器」とともに、この２つの装置が、緊急時の対応能力を飛躍的に高め、心臓手術を除く「新生児の全ての手術」を可能にしたのです。（J）

（引き続き、次のページに河田さんの視察報告があります。是非、読んでください。）

〒466－0822　名古屋市昭和区楽園町１３７　１－１０
チェルノブイリ救援・中部　代表：中島しぐれ
郵便振替：00880－7－108610
TEL／FAX：052－836－1073（月・水・金　10：30～15：30）

ウクライナ帰国報告

新生児の外科手術が可能に！援助の積み重ね実る

冬のウクライナは久しぶりです。多忙な毎日でしたが通訳の竹内さんともども元気に過ごしました。到着翌日、早速移住者の村へ。こんこんと降る雪のゼレムリャ村は人影もまばらですが、診療所の中は暖かく、医師や看護婦さんらの幸せそうな顔でいっぱい。というのも、救援・中部の援助で「包帯とガーゼは患者が持参」という張り紙も消え、薬棚と往診鞄の中は医薬品がいっぱい詰まっているからです。3 年前とはうって変わった明るい表情の職員達を見て、つくづく継続して良かった、と思いました。

汚染地域ナロジチには訪問直前に現地で購入しておいた沢山の医薬品の段ボール箱と、消防車用無線機セット 2 組を車に積み込んでの出発です。ナロジチの出入りには私たち外部の者は検問所を通らなければなりませんが、住民は出入り自由です。長い雪道を外に出ていくナロジチ住民の後ろ姿を見ながら、彼らの未来はどこにあるのだろうと、考え込んでしまいました。今、州内でもガン発生率や死亡率が最も高いのがナロジチです。お会いした事故処理作業員は 11 名（女性 2 名）。「救援・中部の援助が私たちの命をつなげているのです」と口々にいう彼らは大抵 3～4 個の病気を抱え、入退院を繰り返しています。13 年前、20 代でチェルノブイリの現場で働いた彼らもすでに 30～40 代、希望に満ちた青春時代から一転して人生の大半をチェルノブイリの後遺症と闘うことになった彼らとの面接調査はつらいものがありました。

明るいニュースもあります。以前から集中的に援助している州立小児病院では、これまでの援助の積み重ねで、永年の願いであった新生児の外科手術がついに可能になったのです。心臓以外すべての外科手術が可能になり、若い医師達は張りきって仕事をしています。しかし、政府の予算は年々少なく、白血病の薬が来週には無くなる、と訴えていました。

最後に、科学アカデミーや保健省が永年蓄積した、チェルノブイリによる健康被害調査の膨大なデータを入手することが出来ました。追々ご紹介します。これらの資料を持ち帰るために、たくさん頂いたウオッカなどおみやげの数々を現地に残して来ざるを得なかったのは少々残念でした。

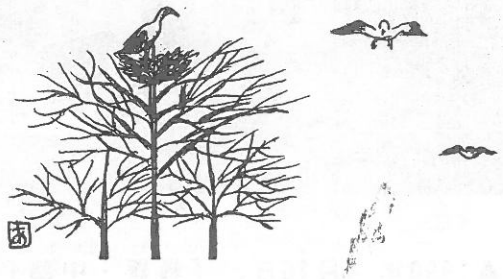
（河田昌東　記）

チェルノブイリ救援・スタディ・ツアー99 決定！

（チェルノブイリ救援・中部主催）

企画検討中だった第二回目のスタディ・ツアーの内容が、決定しました。

この４月２６日で、チェルノブイリ原発事故から１３年。放射能被災者の健康状態はますます悪化しているにもかかわらず、国の経済混乱から見捨てられようとしています。そんな中で恒例となってきたミルク・キャンペーンやカード・キャンペーンなどによる日本の市民からの暖かい支援は、現地の人たちの希望となっています。チェルノブイリが大きな犠牲を払って教えてくれた原発事故の恐ろしさ、かけがえのない地球環境を守ることの大切さをウクライナの美しい大地に立って、人々と交流しながらともに考えたいと思います。是非ご参加ください。



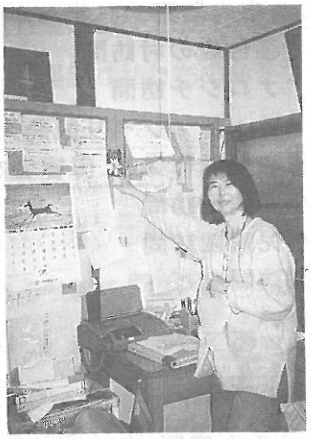
日時：1999年９月５日(日)～９月１４日(火)
費用：（約）２６６，０００円
参加予定人数：１５～２０人
申し込み締切り：６月３０日（第１次）
旅行代金支払い期限：８月５日（書類提出期限）
手続き完了：８月２５日
問い合わせ・申し込み先：チェルノブイリ救援・中部

月　日	日　　程	宿　泊
９／５（日）	11:15　関西空港発（オーストリア航空）ウイーン経由 16:15　ウイーン着	機内泊 ウイーン泊
９／６（月）	10:35　ウイーン発（オーストリア航空） 13:35　ウクライナ・キエフ着 バスでジトーミルへ 18:00　ジトーミル着	 ジトーミル泊 サナトリウム(予定)
９／７（火）	オリエンテーション後、ジトーミル市内散策、バザール	〃
９／８（水）	コース別見学　Ａコース：バスで移住者の村訪問 Ｂコース：　〃　ナロジチ訪問 Ｃコース：　〃　チェルノブイリ原発見学	 〃
９／９（木）	チェルノブイリ被災者との交流(事故処理作業者、障害者など)	〃
９／１０（金）	コース別見学　Ａコース：州立小児病院訪問 Ｂコース：市立小児病院訪問 Ｃコース：孤児院訪問など 午後　移住基金委員会との話し合い 夕　さよならパーティ	 〃
９／１１（土）	朝　バスでジトーミル出発　キエフへ 昼　キエフ着　市内観光(聖ソフィア寺院、アンドレイ坂 ペチェールスカヤ大修道院、ドニエプル川) 夜　バレエまたはコンサート鑑賞	 キエフ泊
９／１２（日）	午前　キエフ市内散策 15:20　キエフ発 16:25　ウイーン着	 ウイーン泊
９／１３（月）	13:20　ウイーン発（オーストリア航空）	機内泊
９／１４（火）	7:30　関西空港着	

特集！　おかげさまで50号！

「救援・中部」9年間の歩み！！

▲1990年 4月16日、「救援・中部」誕生。その夏、日本の救援団体として初めて、450Kgの救援物資を持ってウクライナ現地を訪問。以来、顔と顔の見える救援活動を目指し、平均年２回の視察団を派遣。



▲1992年 4月、名古屋市昭和区楽園町に事務所を開設。『ミルクキャンペーン』や『カードキャンペーン』等の救援活動の拠点として活躍。1994年 9月には、ウクライナに駐在所を開設（竹内氏常駐）。

▼1991年 8月、現地新聞社の編集長ネチポレンコさんと州立小児病院のアルチュフさんを招待して、講演会『５年目のチェルノブイリ』を開催。その後も、ジャーナリストのコバレフスカヤさん、事故処理作業に従事した消防士のアントニュークさん等を日本に招き、貴重な話を聞く事ができた。

▼1992年 4月、ニューヨークの国連本部まで出向き、『チェルノブイリの被災者を放射能難民として認めて！』と訴え、覚え書きを提出した。これに同調して、米市議会が救援決議を採択。

▲1990年11月、「マザー TO マザー／日本の母からウクライナの母へ」というタイトルで、文通を呼び掛ける記事を現地の新聞に出した。大きな反響があり、日本に 107通の手紙が届いた。これを機に、今も日本の母とウクライナの母の文通が続いている。この手紙は『たった１回の原発事故で』等の本に納められている。

▲世界各地で起きる核の問題（インド・パキスタンの核実験強行・動燃の事故隠し等）に対し、抗議声明文を提出するなど、核に対する私たち「救援・中部」の考え方を広くアピールし続けています。

▼1996年 4月、14名の参加を得て『スタディ・ツアー』が行われた。この時、移住村「ゼレムリャ」を訪問した事がきっかけとなり、『移住者の村支援』が具体的にスタートした。

▼1997年 8月より、事故処理作業者の支援がスタート。医薬品・車椅子・防火服・無線機などを送っている。汚染地の火事の消火活動により、今もなお被曝は避けられない。

『ポレーシェ』は、これからも皆様のカンパの行き先を見届け、被災地の最新情報をお伝えすると共に、地球上からすべての核がなくなるまで発行を続けたいと思います。応援してください。

速報！「チェルノブイリ奨学金事業」を始めます！！

〈汚染地ナロジチにも若い医師が必要です〉

「救援・中部」の支援事業は医療支援が中心です。

原発事故の被災者救援が目的ですから当然です。しかし、同時に「ウクライナの人々の自立のために直接的に貢献する支援はできないものか」という思いがずっとありました。

そこへある方から総額1，000万円の寄付の申し出があり、この寄付金を元にして新しい事業を始めることにしました。

そして運営委員会でいろいろ検討した結果、「奨学金給付事業」がよいという結論に達しました。自立のための支援であるし、事故処理作業者の子どもを対象にすることで、被災者支援にもなります。

事故被災者の支援と未来のウクライナを担う人材の育成に寄与するために、医療と教育関係の専門教育機関への進学者を対象とします。また、期間は一応「完了まで10年」を予定しています。

まだ、一部未決定のところがありますが、移住基金との間で早急に詰めて、4月26日（チェルノブイリ事故13周年記念日）までに日本・ウクライナで同時発表する予定です。次号のポレーシェで詳細を報告しますが、上記の1，000万円をベースとして、広く一般の支援者にも寄付を募っていきたいと考えています。（田中）

ミルクキャンペーンに290万円！

＝皆さん、ご協力ありがとうございました＝

'98年度のミルクキャンペーンは、「ボランティア貯金の交付金」が打ち切られ、「皆さんからの募金がすべて」という、大変厳しい状況の中で繰り広げられました。

ところが、皆さんからの反響は、逆にとても大きなものになり、最終的に290万円ものカンパが集まりました。このカンパは、3月26日に国際送金され、現地ではすでにミルクの購入作業が始まっています。今回は、ヨーロッパの国々（たとえばデンマークやフィンランド）から輸入する事になります。もちろん安全性の検査と放射能検査が実施された「きれいな粉ミルク」である証明書付きです。送り先は、「州立小児病院」「市立小児病院」「州立孤児院」等となる見込みです。（J）

ウクライナ講座のお知らせ

第2回（2／20）第3回（3／20）と、回を重ねるごとに面白くなってきたウクライナ講座。講師陣も「イリーナさん」「タチアナさん」「アンドレイさん」と充実しています。今後の計画を再度ご紹介いたしますので、奮ってご参加をお願いいたします。（京）

	日時	場所	タイトル
第4回	4／17	伏見ライフプラザ	チェルノブイリ原発事故について
第5回	5／15	名古屋国際センター	ウクライナ料理を作って食べる
第6回	6／19	名古屋国際センター	ウクライナの人々の暮らし
第7回	7／17	名古屋国際センター	ウクライナの歌を歌いましょう
第8回	8／7	名古屋国際センター	チェルノブイリ「スタディ・ツアー」
第9回	9／18	名古屋国際センター	ウクライナの文学を読む
第10回	10／16	名古屋国際センター	華麗なるキエフ・バレー
第11回	11／20	名古屋国際センター	ウクライナ語で話しましょう
第12回	12／18	名古屋国際センター	ウクライナ・何でもコーナー

チェルノブイリ１３周年　救援コンサート

ナターシャ・グジー
消えた故郷・生命の輝きを歌う
１９９９年5月29日（土）
１４時開場　１４時３０分開演
名古屋 YWCA:多目的ビッグスペース
〈スライド・講演〉　広河隆一
（チェルノブイリ子ども基金代表・フォトジャーナリスト）
一般　２０００円　高校生以下　１０００円
（全席自由席）

ナターシャ・グジーが帰ってきました。

ウクライナの民族楽器バンドゥーラを抱えて。チェルノブイリ事故から１３年。世界がチェルノブイリのことを忘れかけている今も、放射能は猛威をふるい続け、つい最近も汚染された町がひとつ消えました。ナターシャの故郷プリピャチは今は死の町。事故当時幼い子どもだった彼女の世代は、もっとも激しい放射能の影響を受け、周りでは多くの友だちが甲状腺ガンで倒れ、他のガンで死んでいく子も多く、事故処理にかり出された親が死んでいくケースも多発しています。今、救援を訴えるグジーの澄み切った歌声からは、深い悲しみとそれを乗り越えていく生命の輝きがほとばしります。彼女が歌い続けることができるように、そして子どもたちが健康で幸せな未来をもてるように、あなたのご支援をお待ちしています。

ミルクキャンペーンに使ってください！

阪神大震災の劇 感動誘う

岐阜 長良養護学校で『金華祭』

「西遊記」を熱演する生徒たち＝岐阜市長良の長良養護学校で

<'98.11. 29　中日新聞より>

今年も岐阜県立長良養護学校（８４人）の児童や生徒さんたちが「チェルノブイリの事故で被災した子どもたちにミルクを送ってあげて」とカンパを集めてくださいました。ふれあいの日や学校祭などの折りに募金を呼びかけ、今年は例年の倍近くの２８，０２５円になりました。１２月２日の受け渡し式で、生徒会長の清水めぐみさん、副会長の小木曽信治さん（いずれも高等科３年）は「チェルノブイリ被災者への支援は先輩から受け継いだものです。これからも児童・生徒会の伝統にして行きたいと思っています。」と力強く語ってくれました。

自らも障害を持ちながらなお他の病気の子どもたちを思いやる。この美しくかけがえのない心は、ウクライナの子どもたちにとって大きな支えになっていることでしょう。

（チェルノブイリ救援・岐阜）

ウクライナ⇔日本 ＜情報ホットライン＞

＜雪のゼレムリャ村＞

2／5 ウ⇨日 ・星美学園小学校から FAXをもらいました。こうした手紙を受け取る事は、私達にとってとても嬉しいのです。

2／22 日⇨ウ ・（2/9 ～2/19河田さん訪ウ）無事帰国しました。あなた方の助けで、私たちの目的は全て達成されました。ジトーミル滞在中のあなた方のご親切なもてなしに心から感謝いたします。よいニュースです。郵政省の許可がおりましたので、州立小児病院の医薬品を買うためのお金をもうすぐ送る事ができるでしょう。

2／22 ウ⇨日 ・私たちは、すぐにでも州立小児病院へのお金を受け取る用意があります。同病院は、この支援で多くの病気の子ども達を助ける事ができます。来年度の支援計画に関する各病院の情報をまとめましたので連絡します。（㊟…各病院等の要望をまとめた、詳しい情報が寄せられました。これは、次年度の郵政省や外務省への交付金申請に、大変役立つ情報でした。）

3／2 日⇨ウ ・今日、州立小児病院の医薬品代を国際送金しました。金額は、597,000 円です。今日の交換レート（120.8 円／$）で、4,942.06ドルになります。

3／3 ウ⇨日 ・州立小児病院へのお金がすでに私たちの口座に入ったと言う事をお知らせできて嬉しいです。これから私たちは、州立小児病院のチュムト医師と連絡を取り、スベトコール薬局から必要な医薬品を買います。ありがとう。

3／11 ウ⇨日 ・（市立病院の）バシュク院長が、今日事務所を訪れ「子ども達の粉ミルクがあと数日分しかない」と告げました。彼は、「救援・中部」からの粉ミルクのお金がいつごろになるのかを気にしています。 3月13日は運営委員会の行われる日ですね。実り多い会議となる事を期待しています。

3／15 日⇨ウ ・「救援・中部」の次期代表は、あなた方もよくご存じの「田中良明さん」に決まりました。私たちが粉ミルク代として送る事のできる金額は、 290万円です。これは、政府の援助に頼らない（すべて支援者が寄付してくださった）お金です。粉ミルクとフェニールアラニンレスミルクの割合は、３：１とする事にしました。不足するフェニールアラニンレスミルクは、政府に次年度支援分の医薬品の一つとして申請します。 4月の後半に、車椅子（約40台）や防火服等を船便で送る計画をしています。

3／16 ウ⇨日 ・田中さんが次期代表に選ばれた事を、心からお祝い申し上げます。私たちは、彼が「救援・中部」と「移住基金」の今後の関係の発展に尽くしてくださる事を確信しています。一つ提案があります。毎月のファックスや手紙代を節約するため、業務委託費でパソコン一式を購入してもいいですか？ 今の状況なら値段も安く、一式で約 1,000$（またはそれ以下）です。

※ いよいよ、日⇔⇨ウのホットラインも、インターネット時代となりそうです。（J）

竹内さんのウクライナ便り

（チェルノブイリ救援・中部キエフ駐在　竹内　高明）

＜1999.3.10＞

・ジトーミル州立小児病院では、年間約10,000人の子供が治療を受けているほか、50,000万人が医療相談に訪れている。昨年度、治療を受けた子供の死亡率は100人あたり0.68人であり、この数字は過去10年間で最も低いもの。マルチェンコ院長の話では、病院内の診断、検査、麻酔機器の大半は老朽化、慢性的な資金不足である。昨年病院では640万グリブナ必要であったが、州の予算から支給されたのは130万グリブナ、病院職員への給料遅配は４カ月に及んでおり、その一部は食品などの現物で支給されている。州立小児病院は州により他の施設より優遇されているにもかかわらず、この状況なのである。州予算には必要とされる1/3しか見込まれていない。このような状況が後1~2年続けば、住民に医療を保障することが不可能になるだろうという。（『日々新聞』2/24号）

〈外科手術の写真に見入る
河田さん（州立小児病院にて）〉

・2/24、スラブチチ市の中央広場に、給料未払いに抗議するチェルノブイリ原発職員たちがテントを張りプラカードを掲げた。今年に入ってからの給料とさらに昨年の２．５カ月分もまだ出ていない。（『同』2/25号）

・昨年中ウクライナの失業者数は１．４倍に増えた。今後数年間のうちに、200万人がリストラのため解雇される予定。91~98年の間に600万人が職を失ったという。（『イズベスチヤ・ウクライナ版』2/20号）

３／８夜のＴＶニュースでは、「ウクライナの全ての原発で、12,000人の原発労働者が抗議行動を行なっており、スラブチチでは2,000人が広場に座り込んでいる」と報道されましたが、キエフ市内で電力不足が生じている様子もなく、チェルノブイリ原発での発電自体は続けられているのでは、と思われます。

＜99.3.31＞

４/１から新しい電気、ガス料金が導入され、20%~25%引き上げられる。しかしこの新料金になれば、国民の70%は払えなくなるのではという指摘もある。（『イズベスチヤ・ウクライナ版』3/13号）

・３/６、２カ月半にわたる修理点検の後、チェルノブイリ原発３号機が再び営業運転に入った。この修理と新しい設備の取り付けは、ヨーロッパ復興開発銀行の補助金（1億1800万ドル）によって行なわれた。去年の同原発での発電量は47億4900万キロワット/時、ウクライナの総発電量の2.75%であった。全ての原発の発電量を合わせると、総発電量の43.5%になる。（『日々新聞』3/12号）

ユーゴスラビア情勢については、クチマ大統領は調停役を努めるためユーゴに行く用意があると発言しているそうですが、一方で最高会議はウクライナの非核状態を返上すると声明。もっともこれに対し外務大臣タラシュクは感情的反応に過ぎないとコメント。議会と政府のいつもの食い違いがここでも表面化しています。私の学生に聞いてみたところ、例外無くＮＡＴＯの武力行使には反対でした。

こちらは28日より夏時間となり、日本との時差は６時間です。気温は１０℃を超え、春らしい天気です。

『心にとめていてもらいたい』（抜粋）

アレクサンドル・シラター（竹内　高明訳）

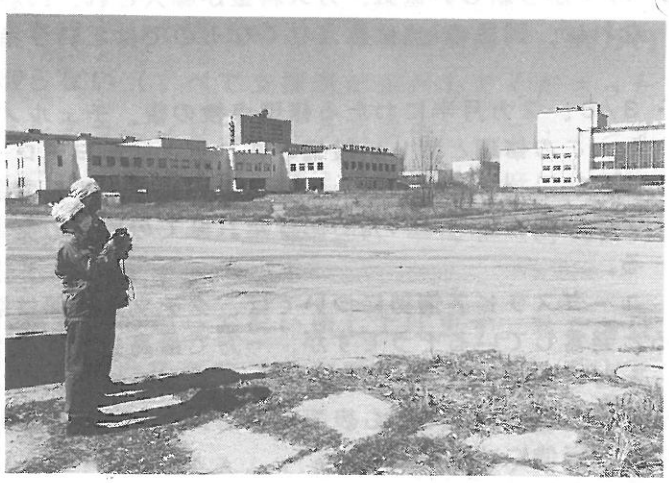
記憶…そして思い出の断片…かつてはすばらしい、新しい町だったプリピャチ。僕の故郷だったプリピャチが僕に残したものは、ただこれだけだった。

1986年4月、僕はまだ１０歳になっていなかった。僕たちにとって、路地や中庭や近くの森やプリピャチ川は遊び場であり、「戦場」だった…，宿命の土曜日、4月26日も例外ではなかった。放課後、友達と川に走って行き、夕方まで砦やシェルターを作りながら過ごしたのを覚えている…。そのあとアパートの住人たちが夜中にそっと呼び起こされ、疎開の準備をしてバスを待つよう言われたとき、僕たちはひっきりなしに原発に行き来する、特殊車両の走る道端の泡立つ水溜りで、走り回っていたのだ。疎開自体もその時にはおもしろい遊びのように思えたものだ。ただ本物の軍の迷彩付きヘリコプターが低空飛行し、本物の装甲車が走り、ガスマスクをつけた警官たちがいて、町の住民みんなを「３日間の予定」で未知の場所へと運んでいった。僕たちは、二度とプリピャチに戻れないことを知らなかったし、悟ってもいなかった…。

残念ながら、その後多くのことを忘れしまった。でもはっきりと覚えているのは、胸に名札をつけた僕らプリピャチの子供たちが輸送列車で運ばれていった、ピオネール・キャンプで過ごした夏のことだ。どこに両親がいるのかさえ知らなかった。僕は初めて一番大切なもの――友達、小さいが快適だったアパートなどを失ってしまった辛さを強く感じたのだった。

その後プリピャチは、夢で見るだけの存在になってしまった。そして1994年春、僕は初めて汚染地域に行き、もうプリピャチに戻ることはできないのだとはっきりわかったのだ…。死んだ町の通りで、見覚えのある建物がガラスの割れたうつろな目のような窓から、無言の避難の視線を向けてくるそばを通り過ぎていくのが、どんなことか想像していただけるだろうか？！人気もなく寒々として、茂みや草がはびこっている。以前、プリピャチから運ばれた異常に大きい菩提樹の葉っぱを見た。今、考えられないような形の野いばらの実に触れることができる。　暗がりに包まれ始めた建物の上に、崩壊した体制の名残りが見えている。「ソ連共産党万歳」の類の美辞麗句の掲示が。「原子力を兵士とするのではなく、労働者にしよう」

プリピャチからの疎開者の集まりは、今では少なくなる一方だ。話題は子供の病気、友人知人の家族の不幸といったことが多くなった，「私たちそのうち、誰がどうして棺桶にはいったかという話ししかしなくなるわよ…」ブラック・ユーモアに思われるだろうか？しかし、悲しいことにそれは真実に近いものなのだ，10年の間にどれほどの苦しみ、悲しみを僕達は身近に見てきたことだろう！９階建てのアパートの各階に４戸のドアが並んでいる中で、ガン、心臓発作、白血病などの死人が出なかった階は一つもない…。



〈無人の街……プリピャチ市〉

94年の春、僕は原子力関係者の新しい町、スラブチチに行った。そして僕を驚かせたのは、新しい世代の原子力関係者たちの「健忘症」だった！以前に変わらず、楽しみもあり祝い事も行なわれていた。華やかなフェスティバルやショー…これはどういうことだろう？――過去を忘れたい、全てを忘れてしまいたいのか？いや、祝い事が良くないと言うのではない。逆に、多くの苦難を経験したウクライナでは、道行く人の瞳から絶望ややり場のない鬱屈を少しでも追い出すために、お祭り騒ぎが必要なのだ。しかしチェルノブイリ原発で新しい石棺を作るための資金さえないというときに、お楽しみのためのお金はあると言うのでは、まるで旧ソ連時代版不条理劇のようではないか…。

原子力産業が新聞やテレビで名誉回復にますます躍起となり、世界の何百万もの人びとの抗議をものともせずフランスが核実験を再開し、ロシアがまたも核のボタンで世界を脅かしている今、僕はチェルノブイリの悲劇から、人類は何の教訓も引き出せなかったのだと苦々しく認めるほかない。チェルノブイリは、僕達人間に、自然と調和して生きねばならないと気づかせる最後の警告だったのかも知れないのに?!自分たちの惑星地球を巨大な石棺とかごみ捨て場に変えてしまわないうちに、僕達は立ち止まり、新たなチェルノブイリの出現を阻まなければならない。そして、1986年4月から何年が過ぎようと、この出来事を決して忘れてはならない。

僕はもうすぐ２０歳になる。僕の世代は、このひどく不安定で理性を失った世界の中で、自らの将来を築き，大人としての人生を始めなければならない。率直に言って、僕は明日自分がどうなるかもわからないし、仕事や住まいや毎日のパンが保証されるかどうかもわからないのだ。しかし、死の町プリピャチを訪れて以来、はっきりわかっていることが一つある――それは、僕の生きた後に廃虚、死んだ町が残ると言うような生き方をする権利は僕にはないと言うことだ。そしてもう一つ確信していることは、地球の住民一人一人が、自分の無責任な行動や怠慢に、みじかな人たちばかりか、全ての地球人の運命が左右されるのだと言うことを理解しない限り何も変わらないということだ…。

あと一つ残っているものは何だろう？――神への信頼！

幼い友人、６歳のミコールカ。彼は事故の後、プリピャチから疎開してきた知人の家庭に生まれてきた。稀なタイプの血液病にかかっていて、医者は３歳までしか生きられないだろうと言った。幸いにも彼は生きているし、皆の祈りが聞き届けられて、さらに長生きできればと思う…。彼の両親が話してくれたことだが、ミコールカが毎晩、誰も見ていない時にひざまずいて、ママのため、パパのため、ウクライナのため、世界と地球のために祈っているのを偶然垣間見てしまったのだという…。死病に侵された小さな子供が、大人たちの罪を許してくださいと祈っているのだ！

ああ、目先の利益にあやつられて危険な計画を実行に移している人々が、この、毎晩全ての人のため祈りを捧げている男の子の眼を、いつも見つめていてくれたなら！……心にとめていてくれたなら……。

（1996年記　於キエフ）

短い自伝：1976年6月7日、ウクライナのヘルソン州生まれ。82年両親が離婚し、83年夏、母と新しい町プリピャチ市に引っ越した。原発事故の後、86年4月27日にキエフ州に疎開した。4月28日、ベラルーシへ行き、5月4日キエフに戻った。5月20日、オデッサ州の海浜キャンプ場に送られ、8月末キエフへ帰った。その後毎年1,2回、母と僕は病院で治療を受け、夏にはサナトリウムで療養した。94年、大学の歴史学科に入学したが経済的な理由などから大学をやめ、今ガソリンスタンドで働いている。96年、米国グリンピースの招きでチェルノブイリ惨事１０周年記念の反核行動に参加した。

＜‘９８年度代表を終えるにあたり＞

＜ナロジチ病院の婦長と中島さん＞

ポレーシェ読者の皆様、長年にわたり「救援・中部」のミルクキャンペーンなどをご支援くださいましてありがとうございます。また、９６年のウクライナ訪問をきっかけに始まった「事故処理作業者支援」も、昨年４月のアントニュークさんとトビャンスキーさんの各地の講演を通じて、支援の輪が広がったことをとても嬉しく思います。

３月２４日、事故処理作業者協会のチュマクさんとアントニュークさんからＦａｘが入りました。

“チェルノブイリ救援・中部の代表として、あなたは事故処理作業者協会を支援し、私たちに大きな援助をしてくださいました。医薬品ばかりでなく、あなたのハートの暖かさ、私たちへの愛もまた、私たちを助けてくれたのです。”――彼等のこの言葉は、私だけでなく、被災者支援にたずさわっているすべての方々に寄せられたものだと思います。

５月にジトーミルを訪問した時も、「救援・中部は、沢山の市民の方々のご寄付により、励まされ支えられている」ことをお伝えして参りました。

８月には、足の反射区（はんしゃく）を揉むことにより、免疫力と自己治癒力を高める「若石健康法」の講習を行なうために、個人的にジトーミルに行きました。州立小児病院・州立孤児院・市立小児病院・ナロジチ病院・州立民間療法センターで、医師・マッサージ師・看護婦さん達に、桐の棒を使って足を揉む方法を覚えていただきました。各病院では、病状によってマッサージを施す医療体制があり、とても興味をもって受け入れられました。

民間療法センターでは、「たくさんの草」という名前の、様々なハーブを使って作られた「放射能を体外に排出する薬草酒」を開発し、販売までこぎつけたとのことです。「こうしたものを被災者に支援できるといいですね。」とセンター長が語っていました。ここでは、足の揉み方をビデオで撮っていました。「素晴らしい健康法を教えてくださってありがとう。」と花束を渡された時、思わず涙がこぼれてしまいました。後日、ジトーミルの２つの新聞に紹介され、「若石健康法」を覚えたい人は連絡ください。という記事になりました。この健康法の普及とウクライナの皆さんの健康を願ってやみません。

９８年度代表としての任期が終わろうとしていますが、代表とは名ばかりで、沢山の書類にサインをしただけのような気がします。郵政省への交付金申請は神野氏が、そして外務省は河田氏が担当してくださいました。申請から報告まで大変な労力を費やされ、みごとに仕事をこなされるお二人に、このページをお借りして感謝を申し上げたいと思います。

チェルノブイリ原発事故という不幸な出来事がなければ、ウクライナの被災者や移住基金のメンバーとの出会いはなかったわけですが、彼らの無類の暖かさと優しさが、むしろ私たちを支えてくださっているのだと、いつもいつも感じています。　（中島しぐれ）

大役ご苦労様でした。クリスマスリースやハーブティーの楽しいバザー等、中島さんの行動力にはいつも頭の下がる思いでした。これからもよろしくお願いします。（Ｊ）

＜ ‘９９年度代表　就任のご挨拶＞

＜前列右端が田中さん＞

私は、９年前に「救援・中部」の設立に参加したのですが、その後は集会に顔を出す程度でした。

それが、２年前代表団に同行して、ウクライナを訪問したのをきっかけに、運営委員会に出るようになり、だんだん取りこまれて、今回とうとう代表を引き受ける羽目になりました。

出不精で外国語が苦手ですから、国際救援団体である「救援・中部」の代表に不向きなことは明白です。しかし、今となっては仕方がありません。そのあたりのことは、経験豊富で有能な運営委員会と、事務局のスタッフに全面的に頼ることで、これまでつちかってきた、国内と現地双方における「救援・中部」の信頼を損なわないよう、微力を尽くしたいと考えています。どうかよろしくお願いいたします。（田中良明）

読者からのおたより紹介

こんにちは。ポレーシェＮｏ．４９お送り頂きありがとうございます。
いつも、内容を読んでショックを受けることばかり。知らないことの恐ろしさを感じることが、今まで多かったのですが、この頃の不景気のせいでこちらの心のテンションもおちているのか、今回は今の自分とそんなに変わらない出来事かのように、冷静に読むことができました。それが良いことかどうかは分かりませんが…。普段はあまりつきつめて物事を考える習慣をもたぬ私なども、地球的規模で今人類が存亡の危機を迎えつつあることを、肌で感じ始めているのかもしれません。ちょうど真中にのっている「チェルノブイリの祈り」よりの抜粋を読んで、涙が出てくるのをとめることができませんでした。前号のたしか２号続きの創作物語も大変すてきでした。美しい文章で語られる哀しい物語、今思い出しても涙が出てきます。そのことを以前お便りしようとして、ついに書きそびれてしまいましたので、今書いておきます。

また、山盛三千枝氏の「ふりーとーく」を読み、見知らぬ人々を結びつけるのは人間としての共感、「同じような経験をした者が分かる感情なんだなー」と感じました。キエフにおられる竹内氏の姉君は、たまたま私の友人で、私はポレーシェが届くと自分が読んでから彼女のもとへ送ることにしています。家族への便りももちろんあるけれど、届きにくかったりすることで、喜んでもらっています。　（枚方市　Ａ・Ｔ）

＜事務所に届いたお便りの数々＞

≪事務局便り≫

早いもので、私が名古屋の事務所におじゃまするようになって、もう１年が過ぎようとしています。

１０年ぐらい前から、原子力発電の恐ろしさを知るようになっていったいどうしてよいのか分からずにいました。私にとって「チェル・救」は、「自分にも何か出来る事のある場所」として、とても大事なところになりました。ここにいると、ほんとうにたくさんの人々が、チェルノブイリの事故に関心を持っていることがわかります。それはとても大事な事だと思います。

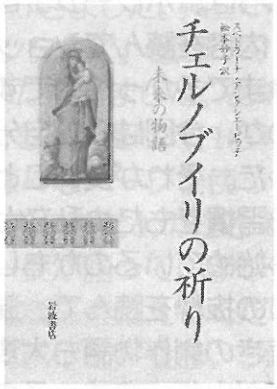
そしてその人達がとてもすてきな人達なので、この救援活動が元気なのだと思います。また、私が出会ったウクライナの人達（消防士さんや留学生のイリーナさん達）もすてきな人達でした。

今、事務所では９月のスタディ・ツアーのための準備を進めています。ポレーシェの読者の皆さんも、「ウクライナ講座」と合わせて、是非参加してください！！私も、参加できるようにお金を貯めるつもりです。（大島弘美）

『チェルノブイリの祈り

・・・未来の物語』

（アレクシエービッチ著　松本妙子訳　岩波書店）



あの事故は何だったのか？　どんな思いを胸に秘めて、あの日から生きてきたのか？　人々が語る、放射能に侵された大地、人々の愛と悲しみ・・・チェルノブイリ。

13ページにもご紹介しましたように、「ポレーシェ」読者の皆さんからも、大きな反響が寄せられています。

あなたも、是非、読んでください！！

編　集　後　記

＊「お父さんが亡くなった」というタチアナさんからの涙の電話。「こんな時に国際結婚は…」と嘆く彼女に、TEL/FAX が宙を飛び交い、『近くの他人』であるジトーミル消防局のアントニュークさん達が優しい心づかいを…。（京）

＊新しい障害者施設（私の新しい仕事）が、１年間の準備期間を経て無事スタートした。春は、すべてが心新たに始まる季節。祝福するかのように桜も満開。（美）

＊「郵政省の´99 ボランティア貯金」の申請締切り（３月末）と、「外務省の事業完了報告」の精算業務が重なり、（もちろん会社の仕事も期末の忙しさの真っただ中で）、あらかじめ運営委員会の了解は得ていたとはいえ、…やはり発行が遅れてしまいました。心待ちにしていた読者の皆さんごめんなさい。「忙」しい時ほど、心は充実していたいもの。そうそう、「心」は「亡」くしてしまわないようにしたいものですね。（J）

印刷所：ぽらんてぃあ　エープリント